

「大学と地域の連携に基づく大学生の体験学習における課題 －教職ボランティア・教職インターンシップを対象として－」

土屋 弥生
日本大学 文理学部



経 歴

日本大学文理学部総合文化研究室准教授，学校心理士。高等学校教師の経験をふまえ，学校教育現場での諸問題に対応するために必要となる教師の実践知について現象学的人間学的な立場から研究。世田谷区立赤堤小学校学校運営委員会委員長，世田谷区希望丘青少年交流センター運営委員。各地の教育委員会等の研修会で講師をつとめる。

講演概要

コミュニティスクール(学校運営協議会制度)が広がり，公立学校は地域とともに運営する学校へと進化している。学校は児童生徒や保護者に加え，地域を巻き込んだかたちで運営されることになった。不登校対応や課題をもつ児童生徒の指導など，学校教育現場には多くの課題や問題が山積しているが，学校の抱える問題は地域社会とのつながりの中にあり，その問題のありようは地域によって異なり，地域の特性を反映しているとも考えられる。

教職課程の理論的な学びにとどまらず，地域や学校の実際のあり方を，身をもって学ぶことができる学校教育現場における体験学習(ボランティアやインターンシップ)は，教職を志望する大学生が現場で活躍するための実践的指導力を身に着けるために欠かせない，重要な学びの機会である。教職課程において学生たちは頭では多くのことを学んでいるが，教師となって現場に出たときには理論知だけでは対処できない様々な問題にはじめて直面し，疲弊してしまう。体験学習は，このギャップを乗り越えていくための実践知に触れる希少な機会でもある。

近年の教職志望者の著しい減少とそれに伴う「教員不足」といった背景の中で，地域を理解し，地域社会を巻き込んだかたちで学校教育現場を担っていく教師を養成するためには，教職を志望する大学生の体験学習の実施についても地域，学校，大学が連携していく必要があると考える。

「学校インターンシップ」は中央教育審議会答申(平成27年)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い，高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」において，教職志望者の学校教育現場における体験学習の重要性が指摘され，教員養成教育の中でその実施が求められている。現時点では教職課程に設置が義務付けられてはいないが，多くの大学では学校インターンシップの実施・試行が始まっている。しかし，「学校インターンシップ」をはじめとする教育現場でのインターンシップやボランティアについては，単に学校の労働力不足を補うものになっていたり，学生の学びが不十分であったり，学生が教職についての負のイメージを増幅させるなど，多くの課題が見られるのも実情である。

今回の講演では，大学と学校，地域の連携において質の高い未来の教師を育てていくために必要な視点，現状の問題・課題を取り上げ，大学，学校，地域のそれぞれのニーズにかなう，目指されるべき体験学習のあり方を具体的に提示したい。